母語話者の類似度評価に基いた韓国語助詞「ey」の計量的意味分析

茂木亮輔
東北大学大学院国際文化研究科
hama@insc.tohoku.ac.jp

1. はじめに

多様な事態に対する言語形式の選択には数的に限界があるため，言語使用のような知的処理では外界で得た知識を抽象化・構造化した枠組みが必要となる．格情報をこの観点から見れば，少数個の言語形式として表れる表層格と多様な意味役割を持つ深層格が言語使用者にどのように認識されているか，また，意味役割の類似性をどのように抽象化して意味構造を形成しているのかという問題が存在する．

ある対象間の類似度がデータとして得られた場合，多変量解析を用いて関係を空間的に表現する方法が知られている．荻野（1989）や鈴木（1994a, 1994b）では，名詞や多義動詞の類義性に対して意味構造が説明されている．同様の方法で，茂木（1999）及び茂木・佐藤（2002）では，日本語の助詞「に」及び「で」を対象にして，深層格の意味構造を分析している．

本稿では，韓国語の助詞「ey（에）」に対して，母語話者による意味類似度評価という客観性・再現性が保証されるデータに対して計量的分析を行い，母語話者に内在する意味構造を明らかにする．また，対照言語学的観点から，韓国語助詞「ey」に対応する日本語助詞「に」との比較を行う．

2. 先行研究

韓国語助詞「ey」は，助詞に先行する名詞が人間・動物以外の無情物の場合に限定され，先行名詞が人間や動物である有情物の場合には「eykey」「kkey」「hanthey」の形態を取る（口語的な場面では「hanthey」を，文語的な場面では「eykey」を，敬意を表す場合には「kkey」を用いる）．本稿では，この中の「ey」の意味構造に着目する．

朴奉相（2000）では，認知意味論の観点から「場所（状態）」を中心とした助詞「ey」の意味的多義性を説明している．また，朴奉相（1998）では作文資料に基き，日本語助詞「に」の 72%が韓国語助詞の「ey/ eykey/ kkey/ hanthey」に対応することを計量的に示している．また，このような韓国語助詞「ey」と日本語助詞「に」の対照研究としては，多和田（1988）や張（1989），金（1990）などがあり，包括的な日韓両語の助詞の対照研究としては朴在権（1997）が挙げられる．しかし，計量的な分析手法を用いているものは少ない．

3. 調査

調査方法は，類似度の調査対象である助詞「ey」が用いられている韓国語の文を設定し，そこから 2 つの文を選出して助詞「ey」の意味の類似度を評価する．調査に用いる文の設定については，朴在権（1997）による「ey」の意味分類を参考にして「場所」「時」「到達点」「比較」「原因」「対象」の 6 つに分類し，この 6 分類に各 2 文ずつ，合計 12 文を設定した．文が N 個あれば全組合せは$(N-1)\times N/2$ となるため，12 文から 2 文を選出した全 66 組に対する類似度評価を求めた．評価は 2 つの文の助詞「ey」に対して，意味の類似度の程度を 5 段階で表す．5 段階評価は，「全然違う」「少し違う」「どちらともいえない」「少し似ている」「非常に似ている」に相当する韓国語を用いた．調査対象者は，日本の大学に留学している韓国語母語話者の 26 名である．

4. 結果

意味類似度の 5 段階評価である「全然違う」「少し違う」「どちらともいえない」「少し似ている」「非常に似ている」を，それぞれ「-2」「-1」「0」「1」「2」と得点化した．

表1：助詞「ey」に関する分類と調査文

分類	調査文
場所 a	산*에* 나무가 없다. san*ey* namwuka epsta. （山に木がない.）
場所 b	그는 지금 집*에* 있다. kunun cikum cip*ey* issta. （彼は今家にいる.）
時 a	첫시간 수업은 열시*에* 끝난다. chessikan swuepun yelsi*ey* kkuthnanta. （1時限目の授業は10時に終わる.）
時 b	사월*에* 일본에 갈 예정입니다. sawel*ey* ilponey kal yeykenipnita. （4月に日本へ行く予定です.）
到達点 a	동생은 학교*에* 갔다. tongsayngun hakkyo*ey* kassta. （弟は学校に行った.）
到達点 b	목수가 지붕위*에* 오른다. mokswuka cipwungwi*ey* olunta. （大工が屋根の上に上がる.）
比較 a	우리 집은 서울역*에* 가깝다. wuli cipun sewulyek*ey* kakkapta. （私の家はソウル駅に近い.）
比較 b	일본은 중국*에* 비하면 작다. ilbonun cwungkwuk*ey* pihamyen capta. （日本は中国に比べると小さい.）
原因 a	추위*에* 떨고있다. chwuwi*ey* ttelkoissta. （寒さに震えている.）
原因 b	홍수*에* 집이 떠내려갔다. hongswu*ey* cipi ttenaylyekassta. （洪水に家が流されてしまった.）
対象 a	네 의견*에* 찬성한다. ney uykyen*ey* chansenghasta. （あなたの意見に賛成する.）
対象 b	그는 요즈음 공부*에* 열심이다. kunun yocuum kongpwu*ey* yeylsimita. （彼はこの頃勉強に熱心だ.）

分析方法として，意味類似度の平均点に対し，クラスター分析及び数量化Ⅳ類を適用する．クラスター分析は距離の平均値を利用するため，対象をいくつかのタイプに分類する定性的な方法であるのに対して，数量化Ⅳ類は量的な異なりを示す定量的な方法であるといえる．

クラスター分析を用いた結果，得られる樹形図を図1に示す．クラスターの長さは，助詞の意味類似度から算出した距離を表す．クラスター間の距離の算出方法については，各クラスターの中で最も近い要素の距離を用いる最短距離法を適用した．図1の樹形図では，左側からみれば類似度の高いものがより小さなクラスターを構成し，逆に右側から見れば類似度の低いものがより右側で分岐していることがわかる．

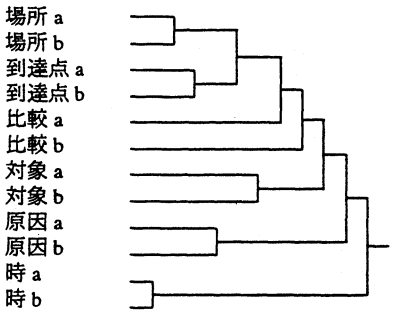

図1：助詞「ey」のクラスター分析樹形図

図1では，左側から見ると，まず，「時 a」と「時 b」が最も小さなクラスターを構成している．次いで，「場所 a」と「場所 b」，「到達点 a」と「到達点 b」，「原因 a」と「原因 b」が各々クラスターを構成している．「場所」のクラスターと「到達点」のクラスターは更に「場所・到達点」という1つのクラスターを作っている．残りのうち，「対象 a」と「対象 b」はクラスターを構成しているのに対して，「比較 a」と「比較 b」は1つのクラスターを作らずに「場所・到達点」のクラスターに属している．最終的にこのクラスターは「対象」「原因」「時」のクラスターと順番に合わさり，より上位のクラスターを構成している．

続いて，数量化Ⅳ類を助詞「ey」の意味類似度評価に適用した結果を図2に示す．図2に対して，図1のクラスター分析結果を反映させることで，図2の点線に示すような4分類を見出すことができた．分類の内訳は，「時 a と時 b」「原因 a と原因 b」「対象 a と対象 b」，そして残りの意味である「場所 a と場所 b と到達点 a と到達点 b と比較 a と比較 b」の4つである．

このように類似度評価を行うことで意味構造を4つに分類し，空間的に位置づけることができた．これらの相互関係については次節にて考察する．

5. 考察

図1，2の分析結果から，韓国人母語話者に内

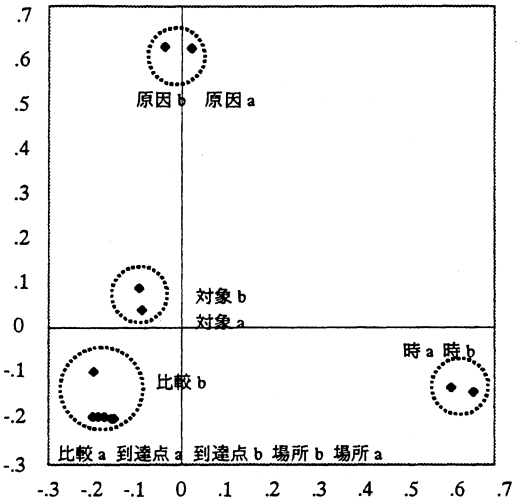

図 2：助詞「ey」の数量化Ⅳ類分析結果

在する助詞「ey」の意味構造を考察する．

図 1 において，意味類似度が高い段階で「場所」と「到達点」が 1 つのクラスターを構成することについては，「ey」の「到達点」の用法において，純然たる方向の意味よりも到達する＜点＞の意味が強いことに起因すると考えられる．これは，先行研究で指摘されているように，動詞が「hyanghata（向かう）」のように方向のみを示す場合には「ey」が使えずに日本語の助詞「へ」に相当する「lo」を用いる現象や，助詞の先行名詞が人である場合に用いる「eykey」において，「chingwueykey kastta.（友達（のところ）に行った）」のように場所を表す名詞がなくても後続できる現象などからも伺える．

次に，図 2 の横軸に着目すると，「場所」「到達点」「比較」が図の左側に，「時」が図の右側に位置している．従って，横軸は＜地点＞か＜時点＞かにより，助詞「ey」の意味をを区分している．「比較」についても基準点を表すことから，＜地点＞である図の左側に位置している．また，「対象」についても，熱意や賛意といった心理的な意識が及ぶ＜地点＞であるため，図の左側に位置すると考えられる．

一方，図 2 の縦軸については，「原因」が図の上側にあり，「場所」「到達点」「比較 a」及び「時」が図の下側にある．「原因」は事態を引き起こす＜起点＞となるのに対して，「場所」や「到達点」は＜着点＞を表すと考えられる．「時」が＜着点＞である図 2 の下側に位置することについては，時間の推移が意識されるためだと考えられる．また，「比較 a」の「sewulyekey kakkapta（ソウル駅に近い）」が，「比較 b」の「cwungkwukey（中国に比べると）」よりも図 2 の下側に位置することについては，「比較 a」が「sewulyek ccokey kakkapta（ソウル駅の方に近い）」と言い換え可能であることから，「比較 b」よりも＜着点＞を表す度合いが強いためだと考えられる．

以上のことから，韓国語助詞「ey」の意味構造には，＜点＞を表す「場所・到達点」を中核として，＜地点＞と＜時点＞，＜起点＞と＜着点＞という「ey」の意味を区分する 2 つの基準があることがわかった．

6．日本語助詞「に」との比較

2 節で述べたように，日本語助詞「に」は韓国語助詞の「ey」よりも意味範囲が広く，有情物を先行名詞とする助詞「eykey/ kkey/ hanthey」を含めて多くの意味が対応する

茂木（1999）では，日本語の助詞「に」に対して，同様の母語話者による意味類似度評価を行い，「に」の意味構造を明らかにしている．助詞「に」の分類は「付着」「相手」「態度」「対象」「場所」「到達点」「時」「目的」とした．助詞「に」対する数量化Ⅳ類の結果を図 3 に示す．

図 3 のように意味類似度評価では，「時」及び「目的」が助詞「に」の他の意味に対して類似度が低く表れた．また，「時」「目的」以外の残りの意味では「場所」「到達点」「対象（位置）」と，それ以外の意味に分かれた．「場所」「到達点」「対象（位置）」は先行する名詞が＜空間＞を表すことから，助詞「に」の意味構造では先行名詞種別が＜空間＞か否かによる相互類似度の差異が存在する．

このことから，日本語助詞「に」と韓国語助詞の「ey/ eykey/ kkey/ hanthey」を比較した場合，先

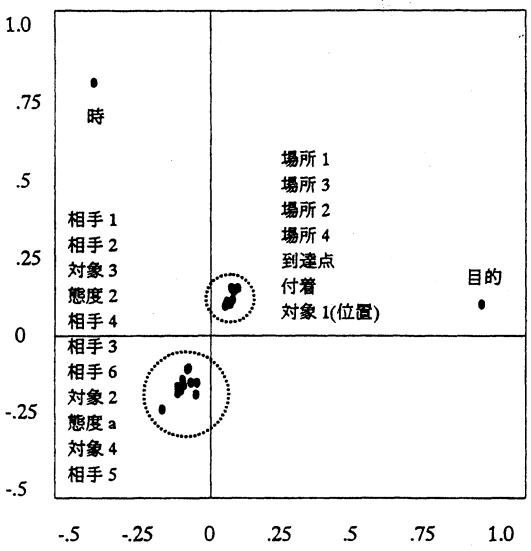

図 3：日本語助詞「に」の数量化Ⅳ類分析結果

行名詞の種別が大きな影響を与えるという共通点があるといえる．韓国語助詞では，有情・無情により「eye」「eykey」などと助詞の形態を変えることで対応しているのに対して，日本語助詞「に」では<空間>か否かにより，1 つの助詞「に」の意味構造として区分を行っている．また，日本語助詞「に」と韓国語助詞「ey」の各々の意味構造を比較した場合，「時」の意味が各々の助詞の他の意味と区分されやすいという共通点が存在する．また，相違点として，日本語助詞「に」の意味には<着点>だけでなく，「与え手」や「使役」のような<起点>を表すものが存在するにも関わらず，助詞「ey」のような<起点>と<着点>を区分する基準は表れていないことが挙げられる．

7. おわりに

本稿では，韓国語母語話者による助詞「ey」の意味類似度評価から，母語話者に内在する助詞「ey」の意味構造を明らかにした．韓国語助詞「ey」の意味構造には，<点>を表す「場所・到達点」を中核として，<地点>と<時点>，<起点>と<着点>という「ey」の意味を区分する 2 つの基準があることがわかった．また，日本語助詞「に」の意味構造と比較し，「時」の意味が各々の助詞の他の意味と区分されやすいという共通点や，<起点>と<着点>という意味区分基準の有無という相違点を示した．

謝辞

本研究を行うにあたり，調査に協力していただいた韓国語話者の方々，韓国語データについて多くを教示いただいた東北大学大学院生の李相穆氏，李卿兒氏に感謝致します．

参考文献

荻野綱男 「類義性の数量化と計量意味論」，『国語語彙史の研究』No.10，和泉書院，1989，pp.1-19.

金仁炫 「日韓両語における助詞の対照研究(2) - 「に」と「에」の意味用法と機能を中心に - 」，『教育学研究紀要』No.35，中国四国教育学会，1990，pp.123-129.

鈴木敏昭 「多義語の構造ーサス，オチル，ヒクの場合」，『富山大学人文学部紀要』No.20，1994a，pp.23-43.

鈴木敏昭 「実験的方法による多義語の研究」，『言語研究』No.106，1994b，pp.45-73.

多和田眞一郎 「日本語朝鮮語対照的考察：「に」「へ」「で」との対照」，『言語習得及び異文化適応の理論的・実践的研究』，広島大学教育学部日本語教育学科，1988，pp.47-57.

張起福 「に格の名詞と動詞の組合せ - 日本語と韓国語の対照研究に向けて」，『東京外国語大学日本語学科年報』No.17，1989，pp.77-86.

朴在権 『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』，勉誠社，1997.

朴奉相 「韓国語の格助詞「ey」」の意味領域について - 自動詞文を中心として - 」，『日語教育』No.17，韓国日本語教育学会，2000，pp.177-200.

朴奉相・伊藤美知子・佐藤滋 「日本語の格助詞「に」の意味領域に対応する韓国語の助詞」，『言語処理学会第 4 回年次大会発表論文集』，1998，pp.123-126.

茂木亮輔 「母語話者の類似度評価に基づいた助詞「に」の計量的意味分析」，日本認知科学会第 16 回大会予稿集，1999，pp.733-736.

茂木亮輔・佐藤滋 「母語話者の類似度評価に基づいた助詞「で」の計量的意味分析」，『東北大学留学生センター紀要』No.5，2002，pp.19-27.